九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ホームでの／民族誌としての応答

飯嶋, 秀治
九州大学

山路, 勝彦
関西学院大学

増田, 研
長崎大学

伊藤, 泰信
北陸先端科学技術大学院大学

他

https://doi.org/10.15017/2344790

出版情報：九州人類学会報. 42, pp.1-24, 2015-06-05. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

【研究報告】
2014 年度九州人類学研究会オータムセミナー

セッション A

ホームでの／民族誌としての応答

飯嶋秀治（九州大学大学院）・山路勝彦（関西学院大学名誉教授）・増田研（長崎大学）
・伊藤泰信（北陸先端科学技術大学院大学[JAIST]）・宮岡真央子（福岡大学）[1]

趣旨説明

飯嶋秀治（九州大学大学院）

2012 年から亀井伸孝を代表にした日本文化人類学会課題研究懇談会「応答の人類学」が発足し、それを展開させる形で 2014 年から清水展を代表にした科学研究費挑戦的萌芽研究「同時代の喫緊課題に対する文化人類学の〈応答〉の可能性の検討」が発足した。そこで当面考察したい主題は2つあった。1つは、フィールドにおける研究者の個々のつきあい方、アクション、技法など（武田・亀井編 2008；小國・亀井・飯嶋編 2011）の体験を収集・検討することで、これは 2012 年から発足した「応答の人類学」で年 6 回の研究発表を 2 年続けたことでメンバーの一通りの体験を報告することができた。いま 1 つは、ホームでの人類学的営みとしての民族誌記述のあり方を典型として、他者表象の実践展開の仕方、人類学独自の寄与の仕方などの史的研究・可能性の検討であったが、こちらは今回まで後回しになってきていた。本セッション「ホームでの／民族誌としての応答」では、この 2 つの問題系のうち、後者に焦点をあてた発表と議論を行った。

研究するフィールドと研究者の出自であるホームとが、多種多様に常時接続し、過去の民族誌においてさえ、むしろ世界システムの経路から切り離されたフィールドが詩的・政治的表象であったと把握されている現在である（クリフォード＆マーカス編 1996（1986））。そのことからフィールド／ホームという二項対立そのものも争点化できようが、これまでの議論を深化させるための問題設定として、こうした区分は採用されよう。こうしたとき、フィールドにおけるよそ者としての調査者とは異なり、私たちがホームにおける研究者と

[1] 他稿との区分を明示したいという編集意図を受け、冒頭に執筆者名を当日の発表順に並べているが、原稿は分担で執筆されており、各原稿の責任は各著者にあるので共著ではない。

 ISSN 1881-7092

して当事者化することは、既に存在する諸表象への問いかけや新たな主張での介入をするため、即座に政治経済の問題にも深く巻き込まれ得る。そうした際に立ち現われてくる問題群の在り方、またそれとのつきあい方は、フィールドにおける個々の行為群とはまた別の広がりと深まりを持ってこよう。これが２つの問題系を分けた便宜的理由である。

今回のセッションで発表した４名の人間は、それぞれ具体的なフィールドとして、まず前半に飯嶋秀治が、「水俣と民族誌—石牟礼道子『苦界浄土—わが水俣病』を中心にして」において国内の医療介入現場における民族誌記述の有効性を考察し、次に山路勝彦が、「大阪万国博と梅棹忠夫」において人類学的他者表象の実践のど真ん中にあるとも言える国立民族学博物館の成立を巡る詩と政治を取り上げた。

後半では飯嶋や山路が取り扱った高度経済成長期のホームでの／民族誌としての応答から半世紀を経て、文化人類学も普及して各種の大学の制度にポストを得た一方で経済的にはバブル経済がはじけリーマンショックも追い打ちをかけたホームで、文化人類学者が国内外の様々なプロジェクトに組み込まれるようになった現在を扱った。具体的に、増田研は、「マラリア研究という応答フィールドで民族誌を売り込む」において、現在の国内外の医療介入の現場ではホームでの／民族誌としての応答として、いかなる課題に直面しているのか、また伊藤泰信は、「民族誌なしの民族誌的実践——産業界における非人類学的エスノグラフィの事例から」において、市場経済の領域での要請がどのように民族誌を文化人類学から流用しつつ新たな「エスノグラフィ」を創造しつつあるのかを報告した。

こうして本セッションで、ホームでの／民族誌としての応答としては、やや一般化して言えば、経済好況下における病理を扱う民族誌と時代経済の要請に応えようとする応答の仕方と、経済不況下における病理を扱う民族誌と時代経済の要請に別の仕方で応えようとするあり方を手に入れることができたであろう。なお、コメントには応答の人類学のメンバーではない宮岡真央子を迎え、特段、応答ということを意識しない文化人類学にとって、本セッションのどのような箇所が論点となり得るのかをコメントしてもらうよう工夫した。

現実のセッション発表の時には時間が不足し、質疑も発表者内でほぼ完結してしまったが、本セッションを収録するにあたり、各発表者には当日の議論も繰り込んで報告を更新してもらった。読者はこの４報告において、各応答の置かれた時代の違い、また応答しようとしている相手の違いなどに注目しながら、ホームでの／民族誌としての応答という本主題の多様性のなかに、自らの在り方を映し出し、自らのホームでの／民族誌としての応答を内省し、位置づけ、次のフィールドに備える機会にしていただければ幸いである。

【参照文献】
小國和子・亀井伸孝・飯嶋秀治編
2011『支援のフィールドワーク』世界思想社。
クリフォード、ジェームス＆ジョージ・マーカス編
1966（1986）『文化を書く』春日直樹ほか訳　紀伊国屋書店。
武田丈・亀井伸孝編
2008『アクション別フィールドワーク入門』世界思想社。

水俣と民族誌―石牟礼道子『苦海浄土―わが水俣病』を中心に

飯嶋　秀治（九州大学大学院）

Ⅰ．はじめに

「ホームでの／民族誌としての応答」を考察する際、水俣と民族誌の関係は、豊かな問題を投げかけてくれよう。既に水俣と民族誌に関する包括的な考察は萩原修子が行っており（萩原 2004 など）、また近代における比較民族誌的考察や石牟礼道子の言う「魂」の考察を慶田勝彦が行っており（慶田 2006 など）枚挙にいとまがない。

そこでここでは考察の主題を石牟礼道子の『苦海浄土―わが水俣病』（以下、副題略）第１部に限定してこの本セッションの主題を考えたい。というのも、『苦海浄土』は水俣病事件を扱った数ある書籍のなかでもおそらく最も版を重ねて広く読まれてきた書籍であるばかりではなく、文化人類学の応答を考えるうえで改めて注目を集めており（清水 2014；木村 2014）、人文学からも社会科学からも考察された論考が豊富にあるので、今回の主題を考えてゆくうえで一連の問題を豊かに呈示してくれるであろうからである[1]。

[1] 本稿のもととなる発表は、①2014 年 11 月本セッションで「水俣と民族誌ー石牟礼道子『苦海浄土　わが水俣病』を中心として」、②同 12 月谷隆一郎・片岡啓・鵜飼信光らの人文学研究会、③2015 年 1 月水俣病事件研究交流集会で「病の民俗誌ー石牟礼道子『苦海浄土』批評から」、④また同月福岡市 KBC シネマで『花の億土へ』上映に当たり、藤原良雄、茶園梨加、田村元彦らの談話や、⑤同２月香月洋一郎、重信幸彦、赤嶺淳、植田今日子らの

以下、本稿では論点を２点に絞る。１点は、『苦海浄土』という書籍がその他の同時代の言説と違いどのような意味で民族誌的特徴を備えているのかを考察すること。もう１点は、その成立史が「ホームでの／民族誌としての応答」に問いかけてくる問題は何か、である。

Ⅱ．石牟礼道子『苦海浄土』の民族誌的特徴

本章で取り上げるのは、水俣市の漁村で「猫テンカン」が『熊本日日新聞』に掲載された 1954 年から、『苦海浄土』が講談社から初版刊行された 1969 年に至る言説群である[2]。

まず遡及的に振り返った時、最初の「水俣病」報道とされるのは「猫テンカン」の報道（小林 2007a）であり、新日本窒素附属病院の細川一医師による厚生省への「四肢の痙性失調性麻痺と言語障害を主症状とする原因不明の疾患」報告になる（石牟礼 2004(1972)：34-39）。これら言説は、新聞記者と医師より書かれており、どちらも筆者からの視線と語彙で構成され、近代文化人類学の「現地人の視点」は登場していない。

次に、作家武田泰淳は『新潮』に「奇病」が描かれる「鶴のドン・キホーテ」を発表し（武田 2000（1958）：189-190）、翌 1959 年には NHK ドキュメンタリー『奇病のかげに』が放映された（小林 2007b）。これらの言説には、それ以前の言説とは異なり「現地人の視線」として特徴的な直接話法が登場してくる。ただし、武田が描いているのは経営者の側であり、また NHK ドキュメンタリーの語りに登場するのはテレビのナレーター、熊本大学医学部世良完介学部長であり、新日本窒素の吉岡喜一社長であり、ここまで被害を受けた患者自身の語りは登場しておらず、いわば患者は描かれる存在であった。

その意味で、被害患者を語りの主体としたのは水上勉の小説であった。ただ水上が『別冊文芸春秋』に発表した「不知火海沿岸」は翌 1960 年『海の牙』として増補刊行された（水上 1995（1960）：11）が、これは「水潟市」という推理小説であった。石牟礼道子が水俣病をあつかった最初の公表原稿「水俣湾漁民のルポルタージュ奇病」を『サークル村』で公表したのはこうした言説の布置においてであった（石牟礼 1960）。その後、石牟礼はある

上京次第研究会で「水俣とのつきあい方」として発表してきたものを、現時点で書き直したものである。このため、その折々に公私にわたりコメントをしていただいた方々のなかで特に重要なコメントは名前を挙げて本稿に取り込んでいるが、必ずしも考察に取り上げられなかったコメントを寄せていただいた方々全員に深謝する。

[2] 参照した文献は２次文献であることも多く、またラジオ番組などは本稿執筆時までに参照できていない。このためその詳細な報告は稿を改めて報告したい。

程度まとまった原稿を、主には 1965 年以降『熊本風土記』に書き継いで、4 年後に講談社から刊行されることになる。こうしてみた時、石牟礼の記述の特徴とは、直接話法の採用（現地人の視点）、彼らが埋め込まれた生活世界の観察（ぶ厚い記述）、そこから見える漁民自身の生活の確かさと、彼らの視線から相対化される読者のあり方（自文化批判）などである。そうしてこうした特徴を担う本書を文化人類学者が「民族誌」の手本としたくなる声があっても無理はない[3]。

Ⅲ．成立史／改稿過程の研究から

だが本書については、1972 年文庫化段階の「解説」で既に渡辺京二が「私のたしかめたところでは、石牟礼氏はこの作品を書くために、患者の家にしげしげと通うことなどしていない。これが聞き書きだと信じこんでいる人にはおどろくべきことかも知れないが、彼女は一度か二度しかそれぞれの家を訪ねなかったそうである」（渡辺 2004(1972)：368-369）それゆえこれは本質的な内因から言って「私小説」なのだと位置づけた。

そのことを裏付けるかのように石牟礼自身も上野英信との対談で、「『苦海浄土』はたんなる聞き書きではないのです。ですから、フィクションだけれども、それをフィクションとしての聞き書きをそこに置きました。その聞き書きの形をとったというのは筑豊から学んだのです。方法論としての聞き書きを森崎和江さんや上野さんの文体からずいぶん学びまして、患者さんに語らせる形、『聞き書きという形のフィクション』という方法論のほうから、逆に事実のデテールを照らし出してみるという方法をとりました。そして、反状況がつくれるかどうか、隠れて見てました」（上野・石牟礼 1973：210）と語っている。

渡辺と石牟礼が端的に指摘したこの箇所を、その後の文学研究者たちは成立史という形で改稿過程の研究をしている。井上洋子（1993）は言葉の置き換えの効果を指摘し、浅野麗（2013）は石牟礼の自己表象の在り方に即して詳細な検討をおこない、茶園梨加（2014）は削除された箇所がサークル村という共同性のなかで編まれた当時の文脈から離床するような効果をうみだすことを考察し、そもそも文庫版へと移行するにつれ写真が全て削除されることとなった効果を指摘している。こうした指摘は本書が「聞き書き」にもとづいた民族誌というよりも、その時々に筆者が「一字一句をも加減せず感じたるままを書きたり」

[3] この他、現地の人々の語りとそうした生活世界を取り囲む日本近代の世界の並列的記述、異質な言説の並置による多声性など、指摘すべき点は多い。

と書いた柳田國男の民俗誌の世界に接近する。

石牟礼は対談で次のようにも語っている。「私自身、上野さんに原稿をお預けしたことをすっぽり忘れておりましたし、そのころはまた水俣の市民集団をつくる下準備で思いつめておりましたものですから、それに没頭していて、本になることなんてきれいさっぱりポカッと忘れていました」（上野・石牟礼 1973：208）。「ですから、水俣の市民会議も『苦海浄土』を書きあげてからでないとつくれなかったのですね」（上野・石牟礼 1973：210）。

Ⅳ．おわりに

こうしてみると「ホームでの／民族誌としての応答」として石牟礼が試みていたのは、水俣に育った彼女が『熊本風土記』を読む都会の読者たちと自身をゆるやかな運動へと駆り立てる過程であったように思われる。そこで興味深い論点はいくつかあるが、紙幅も尽きてきたので今後の論点だけを列挙しよう。１つはこの書物が民族誌というより民俗誌であることは既に指摘した。それは民俗学的聞き書きという独自の領域に意味を認めることになる。この結果として採用された言説がいかに複雑な動態を示しているのかは、重信幸彦に指摘されたように、改めて検討せねばなるまい。次に改稿過程研究は『苦海浄土』のノートが発見されたことで、今後さらにその詳細な成立史が検討され、現在よりも深いプレテクストに接近できるであろう。だがいくら文学研究を研究しても社会への応答に寄与するかどうかは疑問とした下田守の指摘も傾聴に値しよう。最後に、発表時の増田研の発表から着想した点として、本書は石牟礼にとって「ホーム」に向けて書かれていたのであろうか、という点がある。この論点は、最初の論点とも通底し言説を聞く者と見る者、話者と聴者、筆者と読者、地域と都会、詩と運動の間で豊かに展開させることができよう。

【参照文献】

浅野麗

2013「石牟礼道子『苦海浄土』への道」、『敍説』Ⅲ（10）：12-38.

井上洋子

1993「石牟礼道子初期短歌のころ（四）」、『ガイア』７号：22-42

上野英信・石牟礼道子

1973「祈るべき天と思へど天の病む」、『潮』174 号：204-219.

石牟礼道子

1960「水俣湾漁民のルポルタージュ奇病」、『サークル村』第３巻１号：34-48.

2004(1972)『新装版苦海浄土』講談社文庫。

木村周平

2014「災害の公共性」、山下晋編『公共人類学』東京大学出版会：171-185.

桑原史成

1965『写真集　水俣病』三一書房

慶田勝彦

2006「和解と再生」、岩岡中正編『石牟礼道子の世界』弦書房：201-224.

小林直毅

2007a「総説『水俣』の言説的構築」、小林直毅編『「水俣」の言説と表象』藤原書店：15-70.

2007b「テレビドキュメンタリーと『水俣の経験』」、小林直毅編『「水俣」の言説と表象』藤原書店：333-371.

清水展

2014「応答する人類学」、山下晋編『公共人類学』東京大学出版会：19-36.

武田泰淳

2000（1958）『士魂商才』岩波現代文庫。

茶園梨加

2014「石牟礼道子『苦海浄土』成立の過程」、『戦後北九州のサークル運動における文学』九州大学博士論文：93-107.

冨田八郎

1963「水俣病」『技術史研究』No.23：32-46.

萩原修子

2004「水俣学へ向けて」原田正純・花田昌宣編『水俣学研究』藤原書店：33-81.

水上勉

1995（1960）『海の牙』双葉文庫。

渡辺京二

2004(1972)「解説」、『苦海浄土』講談社文庫：364-386.

大阪万国博と人類学者・梅棹忠夫

山路　勝彦（関西学院大学名誉教授）

「人類の進歩と調和」をテーマにして、1970 年に大阪の千里丘陵で開かれた万国博覧会（大阪万国博）は、6400 万人もの入場者を集め、史上かつてないほどの盛り上がりを見せた博覧会であった。通産省（現、経済産業省）が主催になって行われた国家的プロジェクトは、産官学が共同で関わり、多くの日本人がこのイベントに熱狂した。

この熱気を生み出した背景には、当時の日本を代表する企業家、学者、文化人などの知恵と経験が関わっていた。茅誠司（東大）、桑原武夫（京大）、湯川秀樹（京大）、井深大（ソニー社長）、大原総一郎（倉敷レーヨン社長）、大来佐武郎（日本経済研究センター理事長、元外相）、丹下健三（東大、建築）、曽野綾子（作家）などで「テーマ委員会」は構成されていた。この委員会で万国博の主題が議論され、最終的に「人類の進歩と調和」に決定された。まさに日本の知性を代表するメンバーのそろい踏みであった。

このメンバーとは別に、博覧会の骨格を組み立てた中心人物として、当時、通産省にいた堺屋太一（本名：池口小太郎）と京都大学の梅棹忠夫の名前を挙げねばならない。あえて言えば、大阪万国博は堺屋太一と梅棹忠夫の思想が合体してできた産物であった。堺屋には、この万国博はアジアでは初の開催であり、日本のすぐれた文化と伝統、高度の産業水準を世界に発信する好機であるとの認識があった。いわば「近代化論」の立場からする内容を博覧会に求めていた。これに対して、梅棹忠夫は「文明論」の立場から万国博の意義を唱えていた。万国博のテーマ「人類の進歩と調和」はいささか抽象的すぎるので、その内実を具体化するための作業が必要になる。こうして成立したのが「サブテーマ調査専門委員会」であって、梅棹は中心的役割を担い、これに林雄二郎、小松左京、岡本太郎が積極的に支援する態勢を整えていた。この委員会こそが万国博の思想的、学術的意義を支えていたのである。

実は梅棹は、通産省や大阪府が万国博開催を決断する以前に、SF 作家の小松左京、社会学者の加藤秀俊や多田道太郎、人類学者の川喜田二郎とともに「万国博をかんがえる会」を結成し、万国博の文明史的位置づけを議論してきた。小松左京がこの会に加わることで、当時流行していた「未来論」的な発想が濃厚になったのである。こうした背景をもとに、梅棹は大阪万国博に取り組むことになる。

サブテーマ委員会では梅棹は主役の立場にいて、積極的な発言を繰り返していた。その結果として、「より豊かな生命の充実」「よりみのり多い自然の利用」「より好ましい生活の設計」「より深い相互の理解」がサブテーマの四本柱として確定されたのである。この四本のサブテーマは、梅棹忠夫の発想が基本になっていて、梅棹が歩んできた文化人類学の世界が博覧会で応用されたことになる。このサブテーマは、大阪万国博の最高意思決定機関である常任理事会で承認され、博覧会で展示参加を希望する企業や自治体などに通知されていく。出展を希望する関係者は、いずれかのサブテーマに即した内容で企画を立てていった。

この四本柱策定の過程では厳しい議論が委員会では行われていた。例えば、「よりみのり多い自然の利用」ということで、その内実が論議されている。自然と人間との関わりが議題になっていて、その利用をめぐって科学の役割が文明論的見地から討論されている。井深大は「産業（科学）主義」を推進すべきだと言うのに対し、赤堀四郎（阪大総長）は批判を投げかける。梅棹は文明論の立場から、「文明とは大地の利用と改造」であり、「荒れていたものをよくする」ように歴史は進展しているのであって、「調和的改造」は人類史の趨勢と発言する。しかしながら、この発言に対して、反論を呼びこんだ一幕があった。梅棹の発言は、環境汚染、森林破壊、土壌劣化など、現代が抱える諸問題に対して無関心でありすぎるという主旨の批判である。

『文明の生態史観』を発表して一躍名声を博した梅棹は、1960 年代には「情報産業論」に関心を寄せていた。この「情報」という考えこそ、大阪万国博を特徴づけた概念であった。三菱グループは「三菱未来館」というパビリオンを創り、最新のコンピューター技術を駆使して未来の日本人の生活を描き出した壮大なプロジェクトを立ち上げた。住友グループは世界の昔話を題材にしたパビリオンを創りあげた。それは子ども心に通じる昔話には違いないが、「光と音響」、そして「映像」をふんだんに用いた企画で、万国博の全体の展示内容を象徴するものであった。こうした試みは、梅棹の情報理論と整合的であった。

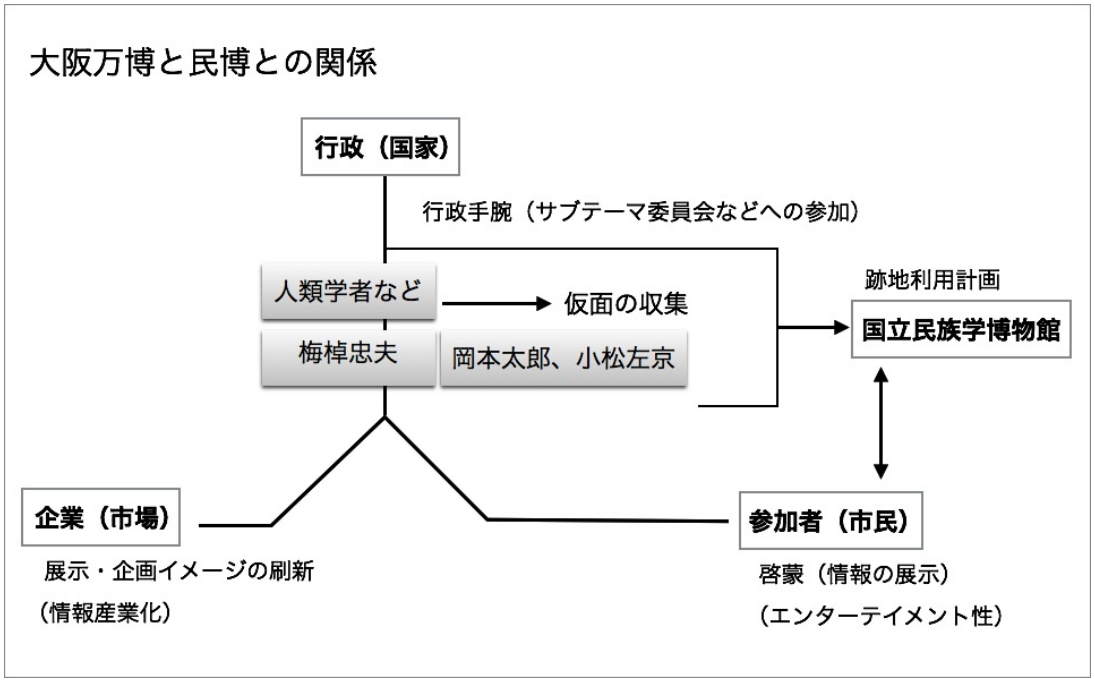
このように見てくると、梅棹の発信力の大きさが分かってくる。しかしながら、大阪万国博に対しては、当初から激しい反対運動が起こっていた。「ハンパク（反博）運動」として語られているこの運動は、主にベ平連（「ベトナムに平和を！市民連合」）が中心になり、新左翼系の建築家集団が同調したという過程をたどっている。この運動に呼応して、東大文化人類学教室に所属する全共闘（「全学共闘会議」）も、「反万博、反民博」を唱えて批判的行動を起こす。その主な論点は、「産学共同」路線への批判であり、大阪万国博はまさに

その路線を踏襲するものにほかならないと断言するのである。

当時、日本民族学会（現、日本文化人類学会）は特別チームを組んで、国立の民族学博物館の設立に向けた構想を練り、文部省（現、文部科学省）など関連機関と折衝のさなかにあった。この構想に対して、東大文化人類学教室の全共闘は全面的に反対し、日本民族学会の総会でも意義を唱える行動に出た。人類学が資本主義体制に加担しているのではないかという論理からである。当然、梅棹忠夫にも反対声明は届けられていく。これに対する梅棹忠夫の反発は激烈であった。独自の文明史観をもって野外調査を実践し、社会的には実学を重んじ、啓蒙活動にも勤しんでいた梅棹には、「反万博、反民博」は許しがたい声明であった。その反発の厳しさは、「歴史の駒を逆転させる反動ども」と非難した言葉に表わされている。

大阪万国博は 6400 万という人々（市民）の参加を得たことで昭和史に残る一大イベントであっただけに、閉会後の残務整理もたいへんであった。その終了後、会場の跡地利用が議題にのぼった時、梅棹は民博（「国立民族学博物館」）の設立に積極的に動く。民博の設立は戦前期から渋沢敬三の希求するところであったが、大阪万国博を契機として陽の目を見ることができたのである。それは、啓蒙家としての梅棹の姿が立ち現れた場面でもあった。

ここで、民博と大阪万国博をめぐる諸関係について図式的に整理してみたい。行政（国家・大阪府）、市場（企業）、参観者（市民）との関連枠組みのなかで、人類学者・梅棹忠夫の立ち位置を概略化した図式である。行政側が立ち上げた各種委員会のなかで、梅棹はサブテーマ委員として発言権を発揮している。この国家的行事としての博覧会で決定的な役割を演じたのが梅棹である。梅棹自身は企業に積極的に働きかけをしたわけではなく、むしろ小松左京の説得力が大きかったと言えるが、企業側は梅棹の構想を組んで出展に参加していた。



大阪万国博のシンボルは太陽の塔である。その塔の内部には、地球の誕生以来の生物の進化の状況が展示されているが、それらと並んで諸民族の仮面が展示されていた。それらの仮面は、泉靖一とともに梅棹が企画して、若き人類学者を世界各地に派遣して収集させた民族学資料群であった。後に、これら資料群は民博に移管され、一般の啓蒙活動に貢献した。これで、梅棹の悲願であった学問情報を伝達する機関設立の道筋が整えられたことになる。

梅棹のような人類学者は日本では稀有である。それは台湾研究での馬淵東一の生き方とは真逆である。馬淵は、国家（教授会・学会を含め権力嫌い）、市場（印税稼ぎの原稿を忌避）、市民活動（素人学問の軽蔑）を嫌い、専らフィールドワークに勤しんでいた。丹念な聞書きをもとに際限となく続くエスノヒストリーの記述は現在の研究者には無味乾燥とも思えるかも知れないが、馬淵の業績は過去の歴史を知ろうとする台湾人の間では高く評価されている。「応答の人類学」はどちらの人類学者に顔を向けているのであろうか。

ただ、アカデミズという名義のもとで特権的待遇が与えられていたかつての時代とは違って、今では社会とのかかわりで学問成果の発信力を高めようとする動きが顕著である。90 年代以降に登場した開発人類学は、そのよい例である。しかしながら、問題は残っている。ミクロコスモスのなかに閉じこもって地域研究の一環として人類学研究を続けているだけでは、人類学の将来は見通せない。やはり梅棹忠夫のような、多方面の分野に向けて、

様々な人間に発信できるような人材の育成が必要と思われる。「応答の人類学」がこの方面で貢献することを願うものである。

【参照文献】

山路勝彦
2014『大阪、賑わいの日々：二つの万国博覧会の解剖学』、西宮：関西学院大学出版会。

マラリア研究という応答フィールドで民族誌を売り込む

増田 研（長崎大学）

Ⅰ．はじめに

本稿では、国際保健という実学分野における民族誌の位置づけを整理し、この現場密着型アプローチを売り込む可能性を考える。まず国際保健分野における民族誌の位置づけを紹介する。ついで、マラリア研究という分野における調査と論文執筆の基本フォーマットが、民族誌調査と大きく異なることを指摘する。最後に国際保健というマーケットに民族誌を売り込むことの可能性や困難を考える。

Ⅱ．応答の三角関係

マラリアはハマダラカ（羽斑蚊）によって媒介される原虫感染症であり、発症すると高熱に見舞われ死に至ることもある。ミレニアム開発目標（MDGs）ではマラリアを含む感染症の撲滅が目標のひとつに掲げられており、実際この 10 年あまりで、多くのマラリア汚染国において迅速検査キット（RDT）による簡易検査と、ACT（Artemisinin-based combination treatment）を第一選択薬とした治療法が普及した。

マラリア研究は実際には多様なディシプリンの集合体であり、学際的研究分野だといえる。まずはマラリア原虫や媒介蚊の生態を知る必要がある。予防や治療のための薬、検査のためのキットの開発も必要であるし、効果的な蚊帳の開発と配付の研究も必要で

ある。さらにはマラリアに関する正しい知識の普及、対策プログラムの策定と実施といった実践的アプローチも探求されているし、そのための基礎的な調査として住民の治療希求行動の調査も数多く実施されている。このうち、民族誌や人類学のアプローチが有効であるとされるのは住民のもつ観念や行動の記述にあたる部分である。

ここで暫定的に「国際保健」という日本語で紹介している研究・実践分野は、正確には global health と international health という 2 つの分野をカバーするような曖昧領域である。国際保健は主として開発途上国の健康開発を、グローバルヘルスは世界の保健の公平性を主として担うとされているが（Koplan 2009）、その活動領域はあまり区別されない。いずれも、その学問的基礎は公衆衛生学（public health）である。民族誌や人類学は、公衆衛生を介して医学とつながることになる。

こうした領域において民族誌はどのような役割を期待されているのだろうか。筆者は 2008 年から、勤務する長崎大学に新設された大学院国際健康開発研究科で研究指導に携わってきた。もともと長崎大学には世界有数の熱帯医学研究所があり、この大学院でも参画教員の構成は医学や開発学に大きく傾いている。研究アプローチの面においても、国際保健における調査手法の圧倒的多数は統計解析をともなう「量的研究」であり、その点でも人類学者はマイノリティである。

「ホームでの／民族誌としての応答」という本特集の課題に引きつけて考えてみよう。ホームの対義語を「感染症に苦しむ人々の世界＝フィールド」とすれば、民族誌的な知見を共有し呼びかけあう学術的領域がホームである。

他方、スポーツの世界のようにホームの対義語を「アウェー」とすると、国際保健分野で民族誌をすること（Doing Ethnography）は「アウェー感満載」の戦いである。私のような者にとっては、人類学こそがホームであり、自分がいる場所（国際保健）はアウェーのスタジアムである。

このように、人類学者は国際保健の場を「アウェー感」を持ちながらホームだと認識する二重所属を生き続けることになる。国際保健医療の学会に参加するときには、「人類学者です、民族誌的調査をやっています」と自己紹介し、自らを「もの珍しい生き物」として宣伝する一方で、アフリカ研究の世界では「国際保健のほうにも足を突っ込んでいます」と、やはり自分自身を差別化できる。本論考のテーマである「売り込み」という点では、上記のような存在の曖昧さは誠に便利なのだ。

Ⅲ．民族誌は必要とされているのか？

近年、国際保健の調査手法に関する出版物のなかに、医療人類学的知見や民族誌的アプローチの必要性を唱えるものが増えている。医療人類学そのものが「応用人類学」の一つとして、実践を指向して生まれたことを思えば当然のことであるが、近年の民族誌への視線の熱さは、それが（人類学者ではなく）医療系の研究者たちから発せられているところに特徴がある。たとえば 2009 年に出版された『人類学と公衆衛生』（Hahn and Inhorn 2009）は、健康や保健の知識普及には人類学的なアプローチが不可欠であると唱え、多様な資料を用いて問題を鍛え上げる調査手法（民族誌的方法）や人類学的知見を公衆衛生に取り入れることの必要性を訴える。『疫学と人類学』（Trostle 2005）は、文化を単なる一つの説明変数として扱うことなく、人類学が提示する文化的なパターンと量的研究が示す知見を統合する必要性を主張する。

このような主張が数多くなされることで、民族誌はすでに国際保健に対して十分に売り込まれている、と見ることもできる。多くの現場系保健関係者や臨床経験豊富な医師は、民族誌のようなアプローチによって医療的事象を生活全般の中で理解する必要性を十分理解している。

その一方で、国際保健教育の現場でのやりとりの、微細なディテールのなかには、量的研究以外のアプローチへの無関心を垣間見ることもたびたびである。医学、疫学、そして開発実務の世界において結果を示し、議論を支え、方針を決め、評価を下すために必要とされるのは、数字で示される「エビデンス」である。いわゆる「量的研究」とひとくくりにされる調査方法が必要であることは言うまでもない。だが、国際保健は量的研究に依拠することが「すべて」となりかねないサークルであり、民族誌や質的研究法は軽視されるならまだ良い方で、ときには「数字ではないデータを集めるなんて学問がこの世界に存在することすら想像したことがない」という、学問的他者不在状況を目の当たりにすることも珍しくない。

Ⅳ．マラリア研究の主流

すでに触れたように、マラリア研究は多様な領域を含む研究分野であるが、その多くは量的研究である。たとえば Malaria Journal 誌上で民族誌的記述を見つけるのは困難だ。

文献データベース Scopus において、「malaria」と「ethnography」の組み合わせで検索すると、1994 年から 2014 年の 20 年間に 26 本（年平均 1.3 本）の論文が見つかる。マラリア関連の膨大な研究論文のなかではほぼ皆無に近い。

マラリアに限らず医学や保健分野の論文は、どれもページが少なく、共著者が多い。10 名の連名共著でも実際に書いているのはその中の 1〜2 名だろう。構成はどれも共通していて、序論、調査および実験の方法の記述のあとに「結果」（だいたいが表とグラフだ）が現れ、短いディスカッションで終わる。研究そのものはラボワークによる実験、あるいは現場におけるサンプル収集と解析であり、調査がしっかりと設計されていなければならない。論文には「シンプルであること」が求められ、民族誌のように多様な動態や歴史的な背景などに目配りしたディテールの記述は忌避される。こうした要因還元的なアプローチが卓越する研究風土がある。

マラリア研究における民族誌的な関心に基づいた論文としてよく参照されるのは Winch らによるものである（Winch et.al. 1996）。この研究はタンザニアにおける発熱に関する土着の語彙を明らかにするもので、こうした土着の知識が医学的な発熱疾患の定義を相対化することにつながり、ひいては現地での健康教育にも大いに寄与すると主張する。だがこの研究も人類学者がイメージするような長期間の参与観察によるものではない。

IV.「民族誌」の売り込み

ここまで２つの意味における「民族誌」をあえて区別せずに使ってきた。第一に民族誌は「成果物としての民族誌（Ethnographic Product）」のことであり、一般的に人類学者はこの意味において民族誌を認識している。もう一つは「方法論としての民族誌（Ethnographic Method）」のことで、国際保健では民族誌といえば通常こちらを意味する。したがって民族誌はテキストや紙のような「モノ」ではなく、「する（do）」ことである（Angrosino 2007）。人類学者がイメージする「フィールドワーク」とほぼ同じ意味である。

国際保健においては一般に、質的か量的かという二者択一で調査の方向性を考える。民族誌は「質的方法」の一種としてとらえられがちであるが、人類学者はその区分に釈然としないものを感じるだろう。民族誌はそういう枠組みとは別のところで発展してき

た地道な問題発見的野外科学なのだと、この世界で教育に携わってきた私は強く主張したい。

どうやら民族誌は、期待されているように見えて、実際はあまり頼りにされていないようだ。そもそも「量的調査が出来ない人（数学が苦手な人）が質的調査をやる」と思われているフシがある。量的調査は厳密に設計された調査でなければならないが、民族誌調査はいかにもちゃらんぽらんで場当たり的である。調査そのものがせいぜい数週間、ときには数日で終わる量的調査と比べると、民族誌的方法は悠長で、現地語の習得も面倒だし、データは非定型的でまとめにくく、サンプリングも怪しい。

マラリア研究に限らず、国際保健分野では人類学的アプローチは必要だとされているし、民族誌に注がれる視線も熱い。だが、実務の世界での扱いは実に冷ややかであり、私はありもしないマーケットに売り込みをかけているだけなのかもしれない。その一方で、実務から離れた批判的な医療人類学の議論は活発であり、役に立つか立たないかを考えなければ成果物としての民族誌はよく生産されている。

民族誌的にしか把握できないことがこの世界にはある。それは 20 年間人類学をやり続けている私の実感だが、そういうのは浮き世離れした甘い考えなのかもしれない。だが、ひとまず「呼びかけだけはしてみる」というのも価値あることのように思われる。国際保健において民族誌をすることがどういうことかを訴え続けないと、マーケットもニーズも生まれないのだ。

【参照文献】

Angrosino, M.

2007 Doing Ethnographic and Observational Research. Sage Publications.

Hahn, R.A and M.C. Inhorn （eds）

2009 *Anthropology and Public Health: Bridging Differences in Culture and Society* （second edition）. Oxford U.P.

Koplan, J.P.

2009 Towards a common definition of global health. *Lancet* 373: 1993–95

Trostle, J.A.

2005 *Epidemiology and Culture. Cambridge* U.P.

Winch et al.

1996 “Local terminology for febrile illnesses in Bagamoyo District, Tanzania and its impact on the design of a community-based malaria control programme, *Social Science and Medicine*, 42（7）: 1057-1067,

民族誌なしの民族誌的実践
産業界における非人類学的エスノグラフィの事例から

伊藤泰信（北陸先端科学技術大学院大学[JAIST]）

Ⅰ. はじめに

本稿のタイトル（民族誌なしの民族誌的実践 Ethnographic Praxis without Ethnography）はややトリッキーに見えるかもしれない。エスノグラフィには二重の意味があることはすでに幾度となく指摘されているところである。すなわち、質的調査のプロセスとしてのエスノグラフィと、プロダクトとしてのエスノグラフィである。日本の人類学者の語感から言えば、前者の意味でのエスノグラフィは、人類学的なフィールドワークとほぼ互換可能な語彙と言えよう。後者は、日本語で「フィールドワークをして“民族誌”を書く」という意味での、調査成果物としての民族誌である[1]。

エスノグラフィはいまや工学デザインや看護学、経営学など、様々な学術分野で用いられているほか、産業界の実務でも用いられている。それら他領域におけるエスノグラフィは、主として前者の意味でのそれである。本稿では、産業界におけるエスノグラフィを事例として扱う。

[1] 分科会のテーマ「民族誌としての応答」において想定されているのは、『苦海浄土』の分厚い記述を民族誌として読むという時がそうであるような、後者の民族誌（エスノグラフィ）である。本論は、この意味での趣旨には沿っていないことになる。ところで、ある世代までの日本人人類学者にとってエスノグラフィとはとりもなおさずプロダクトとしての民族誌のみを指し、前者のような意味では用いられてこなかったと言って良い。現時点で十分に検討する準備はないものの、ethnography と日本語の民族誌（ひいては、片仮名表記の外来語「エスノグラフィ」と「民族誌」）との間に、コンテクストによっては距離があること（とりわけ、エスノグラフィという語彙が産業界その他で流布している現状に鑑みて言えば）をここで記しておく。

Ⅱ．産業界でエスノグラフィが流通する理由

前述のように、産業界でエスノグラフィと言えばもっぱら質的調査プロセスとしてのエスノグラフィを意味し、それが流通している。産業系エスノグラフィの国際会議の名前もEthnographic Praxis in Industry Conference（EPIC）、エスノグラフィ的実践である。

産業界でエスノグラフィ（的実践）が流通している理由は以下のようなものである。高機能のものが売れるという発想のもとに、機能を追求した製品を市場に投入しさえすればヒットが生まれた。そうした時代と異なり、近年では「製品（機能）を使って人々に何をしてもらうのか」というユーザーの体験（User eXperience）が重要視され始めている。価値観や嗜好が多様化・複雑化している中、ユーザーの現状を的確に知る必要がある。アンケートやフォーカスインタビュー（消費者＝当事者による言語化）では見つけづらい、ユーザーの無意識の行動や潜在的なニーズを掘り起こすという方向にマーケティングが変わりつつあり、そのための調査手法としてのエスノグラフィに注目されている。

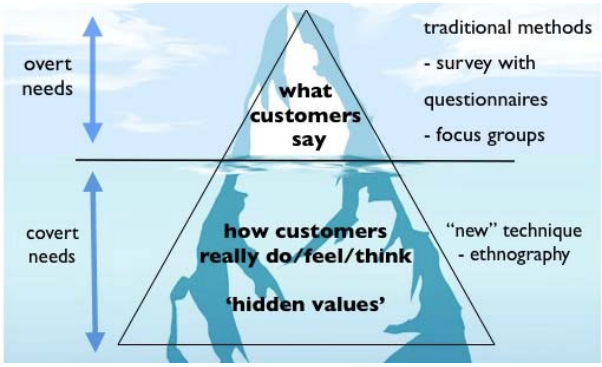


図１　氷山のアナロジー（筆者による描画・作成）

図１は、複数の企業が説明のために用いている図やイラストを再構成して筆者が作成したものである（ある企業は三角形で、別の企業は氷山で表現するなどしている）。従来の手法でアプローチできたのは、海面上の、消費者が言語化できる部分であったとされ、消費者が言語化しない／できない、無意識の行動（ひいては隠された消費者のニーズや価値）にアプローチできるものとして、例えばエスノグラフィに期待が寄せられているということ

である（Ito 2015）[2]。

Ⅲ．語彙の流通

日本の産業界でエスノグラフィが流通しはじめたのは 2008 年−09 年頃からと言って良い。しかし、エスノグラフィがリサーチ会社やコンサルティング会社で当たり前のようにサービスとして提供されるに至っている昨今、エスノグラフィを提供できないと言えない事態が看取されつつある。例えば、筆者がインタビューをしたある調査会社では、エスノグラフィという調査手法をレパートリーとして 15 年前から提供しているという。しかしよくよく尋ねてみると、当時は実査ないしホームビジットなどと言われる家庭訪問などを指しているということであった（当時はエスノグラフィという語彙を使っていなかっただけであるという言明）。また、あるシューズメーカーのヒットの裏にはエスノグラフィがあったとされる記事で、商品企画開発担当者は、開発当時を回顧しつつ、「エスノグラフィをそうとは知らずに実践していた」と語る[3]。現場での粘り強い観察から生まれたヒットではあるが、必ずしもエスノグラフィと呼ばれる必要はない（当時は呼ばれていなかった）が、ヒットの裏にエスノグラフィありとされるのである。エスノグラフィという語彙が buzzword 化していると言えよう[4]。

Ⅳ．非人類学的エスノグラフィ実践

ある洗剤メーカーでは、“アームチェア”エスノグラフィとでも呼べる調査が行われている。「エスノグラフィーでは通常、対象者の家庭を訪問することが多い」が、当該メーカーはあえてこの手段は取らなかったと言う。「その代わりに主婦モニターたちに頼んで自宅の洗濯機置き場をカメラで撮影してもらった。現場を訪ねて観察する方法では、手間がかかるためサンプル数が少なくなる」。その代わりに、主婦にデジタルカメラを渡し、それぞれ

---

[2] より正確に言えば、マーケティングなどにおいて“新しい”手法は、エスノグラフィだけではない。ニューロサイエンスや深層心理学なども同様に、従来の手法とは異なり、水面下にアプローチ可能とされる。ちなみに、こうした氷山のアナロジーは S. フロイト由来であるという（Hersey et al 1996）。

[3]『日経ものづくり』2011 年 10 月号, 78-79 頁.

[4] 日本の産業界においては、行動観察がエスノグラフィの同義語のように流通するなど、エスノグラフィという語彙をめぐっていまだ混乱があるように見える。

の家庭の洗濯機まわりの写真を撮ってきてもらい、それを主婦たちへのフォーカスグループインタビュー（FGI）と組み合わせて分析した。「画像から生活シーンを読み取る試み」であり、「料理や洗濯などテーマを絞っている場合は、住居全体を観察する必要はないので効率的といえる」。そこから主婦達の実態（消費者インサイト）が得られ、液体洗剤の開発およびそのヒットに繋がったという[5]。

ここで看取されるのは、広義の経済（マーケティング調査の効率性、費やされる時間や費用といった制約）が関係していること、さらに、エスノグラフィをビジネスの文脈に連結（翻訳）する際に、エスノグラフィのある部分のみが取捨選択されたり、独自にカスタマイズされていることである。

Ｖ．おわりに

エスノグラフィ（人類学的フィールドワーク）を実践し、エスノグラフィ（民族誌）を書く、というのが我々人類学者にとっての（人類学内部の）自明の学的営為である。そのような人類学内部のロジックとは異なる、産業界におけるサービスとしてのエスノグラフィから我々人類学者は何を得られるであろうか。

（１） アームチェアエスノグラフィを、それでもエスノグラフィと呼ぶことへの違和感を人類学者はおぼえるかもしれない。「フィールド」と（写真を通した間接的な）「観察」とが切り離されていても、（間接的な）観察があればエスノグラフィなのかと。ここで（筆者にその答えの準備できているわけではないが）、果たして現場なしのエスノグラフィは可能か、という人類学徒向けの問いを立ててみることも無益ではあるまい。別の角度から言うと、エスノグラフィ的なるもの（そのエッセンス）は果たして現場に直接赴くことのみに在るのか、それとも、ある種のエスノグラフィックな感受性は、現場へ赴くことの有る無しに拘わらず想定しうるのかといった問いである。

（２） 産業界を参照することで、考えさせられるのは、民族誌（プロダクトとしてのエスノグラフィ）を書くことは自明ではないこと、「人類学」と「エスノグラフィ」という我々に自明のカップリング（連結）も必ずしも不変ではないかもしれないということへの想像力である。「（人類学型の）フィールドワーク」、「エスノグラフィ」、「観察」、「フィールド（現場）」、「（日本語の）民族誌」等々、それらの“連結”のしかた・ありかたは、当然の

[5]『日経情報ストラテジー』2010 年 10 月号, 44-45 頁.

ことながら、人類学の外部では別様であること。

（３） さらに、翻って、もしかしたら我々のホーム（人類学）においても、将来的には別様の姿・別の連結のあり方もあるかもしれない。それは、19 世紀的なアームチェア人類学（アームチェアエスノグラフィ）の時代に、人類学という理論的・分析的営為と、現地のデータ収集とが分離していたことを想定すればよい。19 世紀の人類学者たちがマリノフスキー型の営為を想像できなかったように、例えば、人々の活動のログを遠隔で取得するような新たなアームチェアエスノグラフィを人類学者も実践するという事態を 2010 年代の人類学者は想像できなかった、と数十年後の人類学史の教科書には記述されるかもしれない。

（４） こうした近未来の人類学やエスノグラフィを想定してみることは、既存の人類学的知の枠組を別様に捉えてみることに繋がる。また、人類学の外部における「エスノグラフィ」、「観察」、「フィールド」等々の使われ方を吟味することは、人類学が外部に向けて応答していくために不可欠なことの１つだと考えている。変わりゆく社会（人類学の外部環境）の変化の中で対応（応答）すべき対象を構築しつつ[6]、人類学という学じたいの枠組やカタチが未来に向けてどのようなものになりうるのかという可変性を探ることがそれである。

【参照文献】

Hersey P, Blanchard K.H., Johnson D.E.,

1996 *Management of Organizational Behavior, 7th edn*. Prentice Hall.

Ito, Y.

2015 ‘Ethnography’ in Japanese Corporate Activities H. Nakamaki, K. Hioki,I. Mitsui, Y. Takeuchi (Eds.) *Enterprise as an Instrument of Civilization*. Springer (in press).

[6] 応答性の議論は、潜在ニーズが「そこにあって」応答する（空腹がまずあってパンを与えるような）ものではなく、応答のあり方を議論する中で応答すべき対象が形作られるものと考える。

コメント

宮岡真央子（福岡大学）

「応答の人類学」にはこれまで関わっておらず、自身は台湾の先住民族について研究史回顧と民族誌的研究を目下の主な関心事としている。以下は、わたしのそのような立場からの補足およびコメントである。

山路報告の最後に梅棹忠夫との対比で言及された馬淵東一の社会人類学の出発点は、台湾の先住民族研究にあった。1928 年の台北帝国大学開学と同時に土俗人種学講座に身を置き、教授移川子之蔵と助手宮本延人に学生は馬淵だけという 3 人体制で、馬淵は休みのたびに先住民族村落で調査経験を積んだ。卒業後に同講座嘱託となり、寄付金による先住民族史研究プロジェクトの主翼を担った。その成果物が大著『台湾高砂族系統所属の研究』（台北帝国大学土俗人種学研究室編　1935）であり、同書の 4 分の 3 相当を馬淵が執筆したとされる。馬淵は、戦後も幾度か台湾を訪れたが、基本的には昭和初期の調査資料をもとに彼独自の社会人類学を構築した。

馬淵の関心は、あくまで伝統の記述を通じた社会人類学の考究にあった。馬淵が台湾調査に勤しんだのは、日本が先住民族の生活様式や諸制度の改変を強行する最中のことだったが、馬淵の著作にはそれらについての記述は非常に少ない。「同時代の喫緊課題に対する文化人類学の〈応答〉の可能性の検討」という課題に即していえば、馬淵の人類学は当時、応答性を全くもっていなかったといってよいだろう。ただし、馬淵の著作は近年台湾の先住民族知識人の間でもたびたび参照・引用されており、前掲書の中国語版も刊行された。馬淵を含めた日本統治期の学術研究の成果が、当事者たちの文化復興の一助となったり、エスニシティ再編の契機となったりということが実際に起こっている。つまり、馬淵らによる民族誌の記述が今日現地の人々の間で脚光を浴び、応答性を持つという事態が台湾において生じているのである。

以上をふまえるならば、時の権力者が人々の生活世界を全く顧みず、同時代の人類学や民族誌にも目を向けないという時代状況のなかで、人類学者がなしうることの一つが、フィールドワークと民族誌の記述に徹することなのではないかとも思えてくる。そのことは将来的に、現地の人々と社会が抱える切実な問題に対して応答性をもつ可能性にも繋がるのではないか。もちろん、議論の場で増田や山路が指摘したように、人類学が同時代の社

会に応答する可能性と必要性を忘れてはならないだろうし、そのためには人類学者自身の積極的発信が重要であるだろう。山路の梅棹論もそこに力点があったものと承知している。しかし、時代の枠を超えた「応答」の広がりと可能性にも目を向けたいと思った次第である。飯嶋が論じた石牟礼道子『苦海浄土』が改稿を重ねる民俗誌であり、現在までその意義が評価されているという点は、この側面にも連ねて考えることができるのではないか。

今回のセッションでは、1960 年代／現代という 2 つの時代に応答した／する人類学営為のあり方が報告され、あらためて応答の射程の広がりが示された。なかでも、伊藤報告に接してわたしが想起したのは、近年「行動人類学」の重要性を訴え、実践しているある台湾の人類学者の存在である。その人は先住民族支援の NPO 代表を務め、政府への訴えなどで先導役を果たしている。学術論文も書くが、支援活動自体を人類学者の仕事の一つと位置づけている。このような人類学のあり方は、伊藤の最後の指摘と通ずるものと思われる。すなわち、応答的であろうとすることは、ホーム（依拠する学問領域としての人類学）におけるある種の制度や様式に対して挑戦し、それらを突き崩していくということを意味するのだろう。ただし、応答の結果生み出されるものという点でいえば、マイノリティ支援、企業の商品開発協力、あるいは万博という国家的企てにおける人類学的知見の応用、水俣病患者の民俗誌、国際医療分野での人類学的アプローチの顕示など、それぞれの間で大きな差異が存在することにも気がつく。「民族誌的にしか把握できないことがこの世界にはある」という増田の言葉には深く同意する。そのうえで、人類学の応答性を考えたとき、誰に対し何を企図して応答し、その結果何が生じるのか、という点にも注意は払われねばならないだろうと、セッションが閉じられた後に考えた次第である。

【参照文献】

笠原政治編

2010『馬淵東一と台湾原住民族研究』東京：風響社。

宮岡真央子

2011「台湾原住民族研究の継承と展開」山路勝彦編『日本の人類学』77-119 頁、西宮：関西学院大学出版会。

山路勝彦

2011「馬淵東一と社会人類学」山路勝彦編『日本の人類学』299-241 頁、西宮：関西学院大学出版会。

台北帝国大学土俗人種学研究室編
1935『台湾高砂族系統所属の研究』東京：刀江書院（楊南郡訳　2011-12『台灣原住民族系統所屬之研究（全 2 冊)』台北：南天書局)。

（2015 年 5 月 22 日　原稿掲載承認）